

主は与え、主は取られる

「ヨブ記」からの説教 No.1

【聖書箇所】 1章1節～22節



ベレーシート

●キリスト教における旧約聖書には四つの区分があります。「トラー」(モーセ五書)「歴史書」「諸書」、そして「預言書」です。ヨブ記は「諸書」の中にあり、文学的には「知恵文学」という範疇に入ります。それは、人間から神に問いかける書という特質を持っています。「知恵文学」の中で最初に位置するのがこの「ヨブ記」です。

「知恵」をヘブル語では「ホフマー」(חֲכָמָה)と言い、その語源は「ものを確かめる」「はっきりと握る」という意味です。最初は、職工の技術的な巧みさ、熟練した上手さに用いられましたが、それが人生の技術としてしだいに高められて、世渡り上手、そして、次第に人生の本質をはっきりと見定めて握るという「知恵」として発展して来ました。そうした知恵の視点から、神に問いかけるものとして記録され、残されたのが知恵文学と言われるものです。

●神からの一方的な語りかけではなく、人間から神へ問いかける。あるいは、人への問いかけ(自分も含めて)がなされます。「なぜ」「どうして」「いつまで」といった「問いかけ」は、真理を求めようとする者にとってきわめて必須な精神です。この精神を通して、それまでの常識的な概念の殻が打ち破られ、より深い本質的なものに迫ろうとする、これこそ知恵文学の特徴と言えます。その意味で「ヨブ記」は、まさに「真理への探求心を研ぎ澄ます最高のテキスト」と言えます。

●まずは、ヨブ記1章1～12節まで読んでみましょう。

【新改訳改訂第3版】

1:1 ウツの地にヨブという名の人がいた。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。

1:2 彼には七人の息子と三人の娘が生まれた。

1:3 彼は羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭、それに非常に多くのしもべを持っていた。それでこの人は東の人々の中で一番の富豪であった。

1:4 彼の息子たちは互に行き来し、それぞれ自分の日に、その家で祝宴を開き、人をやって彼らの三人の姉妹も招き、彼らといっしょに飲み食いするのを常としていた。

1:5 こうして祝宴の日が一巡すると、ヨブは彼らを呼び寄せ、聖別することにしていった。彼は翌朝早く、彼らひとりひとりのために、それぞれの全焼のいけにえをささげた。ヨブは、「私の息子たちが、あるいは罪を犯し、心の中で神をのろったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにしていた。

1:6 ある日、神の子らが【主】の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた。

1:7 【主】はサタンに仰せられた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは【主】に答えて言った。「地を行

き巡り、そこを歩き回って来ました。」

1:8 【主】はサタンに仰せられた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいないのだが。」

1:9 サタンは【主】に答えて言った。「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。」

1:10 あなたは彼と、その家とそのすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地にふえ広がっています。

1:11 しかし、あなたの手を伸べ、彼のすべての持ち物を打ってください。彼はきっと、あなたに向かってのろうに違いありません。」

1:12 【主】はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」そこで、サタンは【主】の前から出て行った。

1. 「ヨブという人」のプロフィール

(1) 名前とその意味

●「ヨブ」という名前のヘブル語表記は「イッヨーヴ」(יֹבָב)です。ヘブル語の人の名前は、その人の「人となり」を表わす場合もあれば、その人物とその背景を通して語られている神のメッセージを表わしている場合があります。「ヨブ」はおそらく後者と思われる。

●ちなみに、最も人々から惜しまれたヨシヤ王、最大の宗教改革をなした王ヨシヤの名前の意味は「主は失望した、主はあきらめた」という意味。旧約の最後の王ゼデキヤの名前の意味は「主は正しい」という意味。

●「イッヨーヴ」の動詞は「アーヤヴ」(אָיַב)です。それは「敵対する」「敵となる」という意味を持ちます。それは、一見、ヨブのプロフィール的イメージからすると真逆の意味になるのですが、神に問いかける「敵対、対立、懐疑」的存在、あるいは立場、視点といった意味で捕らえることができます。ヨブ記13章24節に「なぜ、あなたは御顔を隠し、私をあなたの敵(יֹבָבの分詞)とみなされるのですか。」とあります。神に「なぜ」と問いかける者が、神の「敵」という位置に置かれているのです。真実を知ろうとする者が、ときには「(神に)敵対して訴えている者」のように見えるのです。また、天上において、神の言われることに対して「果たしてそうだろうか」と問いかけるサタンの問題提起こそ、「ヨブ」という名前に大きく関係しているかもしれません。

●主は「ヨブ」のことを「わたしのしもべヨブ」と呼んでいます(1:8/2:3/42:7, 8)。「神のしもべ〇〇」という言い方もありますが、いずれにしても、この称号は旧約においては、神が人に与えた「最高の称号」です。どんな人がそのような呼ばれたかといえば、最も多いのがダビデです。次にモーセ、アブラハム、カレブ、預言者のイザヤ、イスラエルの民(ヤコブ)、そしてヨブです。しかも、神から油注がれたメシアなるイエシュアも「わたしのしもべ」なのです。

(2) 資質

「この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。」とあります(1節)。

●ここにはヘブル語特有の同義的平行法(パラレリズム)が見られます。つまり、「潔白で正しく」というフレーズが、「神を恐れ、悪から遠ざかっていた」というフレーズと同義だということです。

「潔白で」はヘブル語の形容詞の「ターム」(טָהוּר)が使われており、「ハフー、ターム」で、「彼は潔白(完全)な人です」という意味になります。「潔白」とは道徳的な意味ではなく、神に対する全き信頼の「完全さ」を意味します。それが「神を恐れる者」ということばで置き換えられています。ここでは動詞「恐れる」(「ヤーレー」יָרָא)の分詞が使われていますが、旧約聖書で「恐れる」とは「信じる」と同義です。一方、「正しい」と訳された形容詞の「ヤーシャル」(יָשָׁר)は、「悪から遠ざかる(者)」と言い換えられています。

| | |
|------|------------|
| 潔白で | 正しく |
| | |
| 神を恐れ | 悪から遠ざかっている |

●余談ですが、同義的並行法(パラレリズム)というヘブル語の独特な修辞法によって言葉の意味がつながってくるのです。聖書が聖書のことばを説明しているのです。それぞれ別の表現でありながら、その意味するところが同義だというパラレリズムの言葉を地道に集めていくことで、聖書の類語辞典を作っていくことができるのです。そうすることによって、聖書の言葉の概念を正しく理解することができるようになるのです。

●ヨブは「神を信じることに於いて完全な者であり」、また「神と人に対しても悪から遠ざかっていた正しい者であった」ということです。このことにおいて、神は太鼓判を押しています(8節)。

(3) 家族と財産

●ヨブには妻がおり、七人の息子と三人の娘が与えられていました。子どもたちは互に行き来し合うほどにとっても仲が良く、それぞれの誕生日には自分の家に招いて祝宴を開き、一緒に食べたり飲んだりするのを常としていたのです。まさに、だれもが羨むような家族でした。

●ヨブは息子たちがもしや「罪を犯し、心の中で神をのろったかもしれない」と思い、七人の息子たちの祝宴(おそらく、誕生日のこと)が一巡したところで(つまり毎年一回)、彼ら呼び寄せて、彼らを聖別するために、ひとりひとりのために全焼のいけにえをささげました。このことの中に、ヨブが族長として家族のために祭司的役割を果たしていたことが分かります。

●ここで「のろう」と訳されたヘブル語はなんと「祝福する」という意味の「バーラフ」(בָּרַךְ)の強意形(ピエル態)が使われています。名尾耕作氏によれば、これは「のろう」ということばを用いず、「祝福する」ということばを用いた婉曲語法で、実際は神を「のろう」意味だと説明しています。

●ヨブは東の人々の中で「一番の富豪であった」とあり、その財産目録が記されています。羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の家畜、それに非常に多くのしもべです。

興味深いことに、ヨブには「七人の息子と三人の娘」の総計が10人。家畜の「羊とらくだ」の総計が1万頭、「牛と雌ろば」の総計が1千五百頭です。その「数」に注目です。量的には異なりますが、すべて「1」という数値で共通しています。「1」という数値はヘブル語の「アーレフ」(א)です。ちなみに、ヨブ記の42章では、すべてを失ったヨブが再び主に祝福されて、子どもたちの数は以前と同様、「息子七人、娘三人」と変わりませんが、所有物は羊が一万四千頭、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭というように、その数がすべて二倍に増えています。つまり、数値としては、人は「1」(א)、家畜は「2」(ב)に変化しています。整然とした数値に、何か隠された秘密(メッセージ)があるように思います。

(4) 舞台

●ヨブの住んでいた場所は「ウツ(אֲצַח)の地」です。口語訳は「ウズ」と訳していますが、原語を見れば「ウズ」とは表記できないはず。「ウツ」の地名はヨブ記の1章1節を除いて、聖書に7回あります。そのうち5回は人の名前として、後の2回はエレミヤ書25:20と哀歌4:21にあります。そして、哀歌では「ウツの地に住むエドムの娘よ」とあることから、「ウツ」は「エドムの地」であることが判ります。しかも、そことヨブ記1章3節の「東の人々」が符合します。

●ヨブ記が書かれた時代については、大きく二つの見解があります。

A. 族長時代という見解

- ①ヨブが族長として家族のために神と人との仲介役としての祭司の務めを果たしていること。
- ②ささげものがモーセの律法の規定とは全く異なる事。たとえば、罪の贖いのための全焼のいけにえはモーセの律法の規定にはないこと。

B. 捕囚以降のユダヤ教の時代という見解

ヨブ記の「人が神に問いかける」という崇高な洞察力の中にみられる「知恵」は、新約時代にきわめて近い頃のユダヤ教に起こった教育運動であり、その遺産が「知恵文学」として展開されているという見解。「知恵文学」には、箴言、ヨブ記、伝道者の書などが含まれます。

●Aの見解も、Bの見解も、いずれもそれぞれ説得力があるように思います。ヨブ記には「時を表わす」語彙がないことから、書かれた時代が明白ではありません。しかし時代が明白でないことが、むしろ逆に、ヨブ記で扱われている人間の根元的問題が、いつの時代にも変わることのない普遍性をもっていることをある意味で示唆しているとも言えます。

2. 「ヨブ記」の問題提起

●「ヨブ記」は「なぜ義人が苦しむのか」という事がテーマだとされています。確かにそう思いますが、ヨブという人物はある問題提起の象徴的存在とも言えます。真の問題提起は主に対するサタンの訴えにあります。つまり、主がヨブのことを「彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいない」(1:8)という断言に対して、サタンは「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。」(1:9)と反発します。「必ずそこには打算がある。」というのがサタンの言い分です。

●「いたずらに」と訳されたヘブル語は「ヒンナーム」(חִנָּאָם)です。「ゆえもなく」「理由もなく」「益もないのに」という意味です。「必ず、そこには隠された自己満足的な打算があるのだ」というのがサタンの主張です。果たしてどうなのでしょう。神を信じている者ひとりひとりに対して、あなたはなにゆえに神を信じているのか」とサタンから問いかけられているのです。必ずエゴ的な動機があるはずだとサタンは主張しているのです。主とサタンとの駆け引きが、たまたま、「ヨブの苦難」を通してなされているように思われるのです。

●「義人がなぜ苦しむのか」という問題提起と共に、「人間は、目に見える利益なしに、果たして、純粋に神を

信じていることができるのか」という問題提起があるように思います。「目に見える利益を奪われるだけでなく、継続的な苦しみを与えられたならば、人は必ず神を呪うに違いない。いたずらに(ゆえもなく)神を恐れる(信じて)ることなどないのだ」というのがサタンの主張です。果たしてサタンの主張が正しいのかどうか、真理なのかどうか。そうした視点も含みながら、ヨブ記を味わう必要があるように思います。

3. 「サタン」の正体(「サタン」と「悪魔」はどう違うのか?)

●ヨブが「潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている」のは、神がヨブに多くの祝福を与えているからで、もしそれが奪い取られたとしたら、必ず、ヨブは神をのろくに違いないとサタンは反発します。そこで神は「彼の身に手を伸ばしてはならない」という条件付きで、サタンの手にヨブのすべての持ち物を任せます。

●ところで、ヨブ記には「サタン」(שָׂטָן)ということばが14回、1章と2章にそれぞれ7回使われています。「サタン」とはどのような存在なのでしょう。

●1章6節を見ると「神の子らが主の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた。」とありますから、いわば、天上会議の中の構成員の一員として「サタン」がいることとなります(天上会議の例としては、I列王記22章19～23節を参照)。ここでの「神の子ら」とは天的存在である御使いたちの意味で使われていると考えられます(2:1/38:7)。神の諮問会議の中に、その構成員の一員か、あるいは傍聴者として冠詞付の「サタン」(שָׂטָן)と呼ばれる一員がいたこととなります。まことに不思議な天上会議です。

●そして「サタン」の存在も私たちのイメージとは随分と異なります。なぜなら、神の諮問会議の中に入ることのできる御使いの一人だからです。ところが、この「サタン」と呼ばれる存在は、他の御使いとは異なって「地を行き巡り、そこを歩き回って」いる存在です。つまり「あちこち回って、人間を見ている」のです。何のために・・・?

●「地を行き巡り、そこを歩き回って」いるサタン。地を「行き巡る」と訳されたヘブル語「シュート」(שָׁוֶת)は、かつてイスラエルの民が毎朝神の与えて下さるマナを集めるために歩き回ってそれを集めた、その「歩き回って」が「シュート」です。ヨブ記の場合は、地上のいろいろなところを「行き巡る」意味で使われています。また、そこを「歩き回っている」と訳されたヘブル語の「歩く」を意味する「ハーラフ」(הָלַךְ)には強意形のヒットパエル態が使われています。つまり、本来、神に仕えるべき御使いが人間の行状を監視する者のように、自らの意志であちらこちらと「歩き回っている」のです。ですから、「おまえはどこから来たのか」と主から尋ねられています。

●主に対するサタンの態度が、「シュート」(שָׁוֶת)と「ハーラフ」(הָלַךְ)の強意形ヒットパエル態の二つのことばで良く表わされていると同時に、「シュート」という動詞には「侮る」というもうひとつの意味があります。サタンの主に対する横柄で、しかも反発的な態度はそこからも見て取れます。

●そのようなサタンが神の諮問会議に参加しているのを見た主は、サタンに、「おまえが地を行き巡り、歩き回って来たと言うなら、当然、おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたはずであろう」と皮肉っています。なぜなら、主の目は一瞬にしてあまねく見渡すことのできるからです(Ⅱ歴代誌16:9参照)。この「あまねく見渡す」という動詞も「シュート」(שָׁוֶת)なのですが、主の「シュート」と「サタンの「シュート」には雲泥の差があるのです。

●サタンも黙っていません。主の言われることに対して悪意的です。そこが他の御使いとは異なる点です。つまり、「サタン」は悪意性をもった存在だということです。そして、はからずも、その犠牲となったのがヨブです。北森嘉蔵牧師は「ヨブ記講和」(教文館)の中で、「悪魔というのは、悪意を人格化したもの。悪意の結晶である。」と定義しています。「むべなるかな」です。

●さて、次に行く前に、聖書のテキスト1章13～22節までを読みましょう。

【新改訳改訂第3版】

1:13 ある日、彼の息子、娘たちが、一番上の兄の家で食事をしたり、ぶどう酒を飲んだりしていたとき、

1:14 使いがヨブのところに来て言った。「牛が耕し、そのそばで、ろばが草を食べていましたが、

1:15 シェバ人が襲いかかり、これを奪い、若い者たちを剣の刃で打ち殺しました。私ひとりだけがのがれて、お知らせするのです。」

1:16 この者がまだ話している間に、他のひとりが来て言った。「神の火が天から下り、羊と若い者たちを焼き尽くしました。私ひとりだけがのがれて、お知らせするのです。」

1:17 この者がまだ話している間に、また他のひとりが来て言った。「カルデヤ人が三組になって、らくだを襲い、これを奪い、若い者たちを剣の刃で打ち殺しました。私ひとりだけがのがれて、お知らせするのです。」

1:18 この者がまだ話している間に、また他のひとりが来て言った。「あなたのご子息や娘さんたちは一番上のお兄さんの家で、食事をしたりぶどう酒を飲んだりしておられました。

1:19 そこへ荒野のほうから大風が吹いて来て、家の四隅を打ち、それがお若い方々の上に倒れたので、みなさまは死なれました。私ひとりだけがのがれて、あなたにお知らせするのです。」

1:20 このとき、ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝し、

1:21 そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。【主】は与え、【主】は取られる。【主】の御名はほむべきかな。」

1:22 ヨブはこのようになっても罪を犯さず、神に愚痴をこぼさなかった。

4. ヨブにふりかかった最初の災難(所有物の奪取)とヨブの信仰告白に見る「敬虔」の実証

●サタンは、ヨブが「潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている」のは、物質的な祝福と結びついているということで、サタンは神の許容のもとでその祝福を奪い取ります。その奪取方法は人的災害と天的災害によるものです。

- | |
|---|
| (1) 13～15節・・・人的災害 ((アラビア南部のシェバ人の来襲)シェバ人の来襲) |
| (2) 16節・・・天的災害 (神の火が天から下る=雷のこと) |
| (3) 17節・・・人的災害 (ティグリス下流西に定着したカルデヤ人の来襲) |
| (4) 18～19節・・・天的災害 (荒野からの大風) |

●突然に襲った災害によって、ヨブは自分の全財産と子どもたちのすべてを一時にして失ったのです。ヨブが悲嘆にくれたことはだれもが容易に想像がつかます。このことによって、神とヨブの関係は、財産や家族を媒介と

しない直接的なものとなったと言えます。

●ところが、そんな状況に置かれながらも、ヨブは神に愚痴をこぼすことなく、非難することなく、呪うこともなく、それを受け入れて、主を礼拝したのです。そしてヨブの口から出て来たのは以下のことばでした。神の主権性を告白した実に味わい深いことばです。

私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。

【主】は与え、【主】は取られる。【主】の御名はほむべきかな。

●この箇所をリビングバイブルは次のように訳しています。

「生まれた時、私は裸でした。死ぬ時も何一つ持って行けません。私の持ち物は全部、神様が下さったものです。ですから、神様はそれを取り上げる権利もお持ちです。いつでも、どんな時でも、神様の御名がたたえられますように。」

●「主の御名はほめたたえられるべし」（ここでは「ほめたたえる」を意味する「バーラフ」(בָּרַחַף)の強意の受動態が使われています)。この告白によって、ヨブの敬虔(信仰)が見事に実証されています。全財産と子どもたちが奪い取られたなら、必ず、ヨブは神を呪うに違いないと断言したサタンの思惑は、みごとに打ち破られてしまいました。

●「母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに変えよう。」というヨブの告白にある「母」は「エーム」(אִמִּי)で、この言葉には「存在の出発点、分岐点」といった意味もあります。つまり、自分の存在の出発点があり、そこに戻るということを意味します。母の胎内に再び入ることは出来ませんが、神がその出発点であるとすれば、そこに戻り、再び始めることができるという含みがあります。たとえ自分のすべてを失ったとしても、自分の戻るべきところがあるということは恵みであり、福音です。しかもこの告白の背景には、神こそすべての源であると同時に、どこまでも良い方、常に、良いことしかかならない方であるというぶれることのない信仰が存在しているのです。

●しかしサタンはそう簡単には引き下がりません。ヨブの所有物を打つことで神を呪わせることに失敗したサタンは、2章においては、ヨブ自身を打ちます。このことについては、次回にふれたいと思います。

2014.5.4